

— 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

第一章でみたように、新しい学力観においては、学ぶ意欲自体が評価される。積極的aに問題解決に向かう姿勢をみせることが求められる。1、このことから、従来の伝統的な学力を身につけ、試験に臨んできた者たちが意欲に欠けていたと考えるのは妥当だとうでない。

自分の関心や好奇心こうきしんに従って問題を考え、レポートにした人間だけが意欲があるとするのはフェアではない。体系的な知識内容を毎日地道にトレーニングして身につけてきた者の持つ、いわば「耐える①た学力」は当然評価されていいものである。

これは、学生時代を終え、社会に出てからのことを考えればよくわかる。仕事においても、必要とされる知識内容は自分が興味関心aが持てるものとは限らない。部署が変わることに、身につけるべき基本知識はその都度新しく大量に提示される。それを記憶し、活用できるというのは、むしろ伝統的な学力をトレーニングしてきた人間が得意とするところである。多くの仕事においては、すでに業務内容がしつかりあるものを正確に運用することが求められるし、仕事の段取りを把握はあくし、職業的に求められる成果を期日内に仕上げる必要がある。これは伝統的な学力を積んできた人間には慣れた活動である。

つまり、社会でよく耳にする「社会で求められる仕事力は、学校でやるような暗記ではなく問題解決型の能力だ」という意見は、必ずしも実態に即そくしていいないと私は考える。プロフェッショナルな仕事をしていくためには、まずその仕事に必要な知識を記憶する必要がある。マニュアルを記憶し、技として活用していく力は、伝統的な学力に近い。その上で、現実の問題に柔軟じょうなんに対処していく問題解決能力が求められるのである。ここでも、二兎にとを捕まえることが必要になるのだ。【A】

新しい学力では学ぶ意欲を基本に据えるため、個人の興味や好奇心が重要視されることが多い。
興味や好奇心から出発する学習は理想的ではある。しかし、微分積分の公式、気体の状態方程式や運動方程式、古文の動詞の活用形といった知識に、一体どれだけの小中高生が興味や好奇心を「自然に」持つであろうか。

試験と評価という強制力があるからこそ、苦手な科目や気の進まない科目の勉強も「しなくてはならない」と思っている。やがて勉強をしているうちに「ああそうだったのか！」という学びの喜びが起きて、自ら学ぶ意欲がわいてくるのがむしろ普通なのではないか。一定の強制力がなければ、面白く思えたはずの勉強を面白く思わないまま終わるとい、きわめてもつたない事態が起こりうるのである。【B】

② 学ぶ意欲は二つのルートで形成されると思われる。一つは、何らかの理由で学習の初期段階からその内容に興味・関心があり、自分から学びたいと思うルートである。歴史ドラマを見て歴史に興味を持つ、惑星の図鑑を見て天体に興味を持つといったことがそれである。この意欲を親や教師が上手く誘導し、上手にテキストを選び、励ましてあげれば、子どもたちは自然と正しく学んでいく。これが「面白い！」から意欲につながるルートである。【C】

もう一つの意欲へのルートは「できた！」が先行してから意欲がわくルートである。はじめは上手いかななくても、頑張って練習問題を解いているうちに、簡単な応用問題が解けるようになる。二次方程式のグラフに最初から興味・関心を持ち、面白いと思う生徒は少ない。しかし、二次方程式のグラフを正確に描き、関数の最大値などが求められるようになると「できた！」と思うようになる。できることが喜びになり、次の学習に対する意欲が生まれてくる。

「今はあまり面白いとは思わないが、頑張って地道に記憶し、練習すればきつとできるようになる」という思いで勉強するのは、まさに学ぶ意欲である。問題解決型の学習ばかりが学習ではない。伝統的な学力を身につけることも、意欲の持続なくしてできることではないのである。

「面白い！」からほとんど学びできるようになると、「できた！」から面白さがわかるというルートはどちらでも構わない。教師のやり方によって前者をとる人もいれば、後者をとる人もいるだろう。【D】

日本で伝統的に行なわれてきた「型」の教育は、後者のルートである。「型」とは、武道を中心にいわれることが多いが、勉強にも存在する。一言でいえば、初心者が一人前になるための教育プログラムである。

3

りや、国語の素読、数学の計算練習などである。型をやるときに、面白いか面白くないかはあまり関係がない。しっかりと型を反復練習することで、一通りの基本的動作が自動的にできるようになる。できるようになることが増えるに従って、面白さも増えてくる。達人たちの経験値が凝縮したものが型である。その型をひたすら自分の身体で反復的にトレーニングし、技として活用できるようにする。

③ こうした学習方法は「個性的」でもなければ「主体的」でもないように思える。しかし、型を地道に何千何万回とトレーニングすることで、しっかりとした技が身につく。そうして習熟すること自体が喜びとなり、習熟することへの意欲が増してくる。日本が得意としてきた「型の学習」は、これからも堅持していきたい大切な学習方法である。新しい学力に夢中になり、アクティブ・ラーニングといった手法に気を取られ、型の学習がおろそかになると、日本人が最も得意とする武器を自ら捨てることにもなりかねない。

学ぶ意欲の、「面白い！」という感動から出発する意欲と、「ようやくできるようになった！」という習熟の喜びから出発する意欲、この二つを両立させるには、どんな指導をすればよいのだろうか。

何よりもまず原点になるのは、親や教師が、様々な知識に対して「すごい！ すごいよ〇〇！」と感動することだと私は考えている。

4

その感動を子どもたちに伝えていく。この「憧れに憧れる関係性」を作ることが、学習の出発点である。何かをすごいと思ひ、憧れるから学ぶ気になるのである。

化学なら、とにかくまず「すごい！ すごいよ元素周期表！」とクラス全員で声に出す。そのあと、教師が周期表のすごさを説明する。生徒たちは、その話を理解した上で、もう一度「すごい！ すごいよ元素周期表！」と言う。

二度目に声に出したときには、生徒の声に、周期表は本当にすごいものだという感動にあふれているようにする。これは教師の説明能力にかかっている。

教科書は冷凍食品のようなものである。解凍しなければ食べられない。これを解凍するのが教師や親の感動である。教科書は、本来「すごい！」知識だけで構成されている。ただそのすごさが伝わりづらい記述スタイルになっている。感動による解凍作業が必要なのだ。

子どもは、教師や親が解凍した食品に感動する。感動があれば、覚えようという気が起きてくる。

その上で、「あれこれ考えないでまずやってみよう。やっていたらできるようになるから」と子どもたちを誘導する。実際にやってみると、確かに問題が解けるようになる、あるいは、確かに知識を身につけられている実感がある。そこに至ってようやく子どもは自分の習熟に自信を持ち、それが次の学びへの意欲となるのである。

あれこれ議論したり自分の意見を言うことはなくても、素直に効果的な型やメソッドを実践することで、技量や学力は上がっていく。このような素直な学習者の態度を主体的でないと批判するのは的外れである。社会生活では求められる知識や技能がある。それらを素直に身につけていく学習者を、単純に「受け身であって主体的ではない」と評価するのは妥当ではない。

(齋藤孝「新しい学力」より)

※メソッド…方法や方式。

問一 二重傍線部 a、c の語句の対義語として最も適当なものを次のア、イ、オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「積極的」					b 「伝統的」					c 「理想的」				
ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ	ア	イ	ウ	エ	オ
消極的	受動的	究極的	抽象的	主体的	古典的	現代的	保守的	革新的	比較的	国際的	現実的	絶対的	悲観的	楽観的

問二 空欄 1、4 に当てはまる語句として適当なものを次のア、イ、オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使いません。

ア そして イ あるいは ウ なぜなら エ しかし オ 確かに カ つまり キ 例えば

問三 本文中には次の一文が抜けています。本文中のどこに入れるのが適当ですか。【A】～【D】の中から選び、記号で答えなさい。

《抜けている文》面白いと思うことを優先させる前者ばかりがよいとは限らないのである。

問四 傍線部①「耐える学力」は当然評価されてもいいとありますが、評価されてもいいといえるのは社会でどのような能力が求められるからですか。最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 与えられた仕事とは無関係に、自分が興味のある知識内容をばかりを学ぶ能力。

イ 学校でやるような暗記ではなく、そのときどきの場面に応じた問題を解決する能力。

ウ 必要な知識を記憶し、段取りを把握した上で期日までに仕事を完成させる能力。

エ 部署が変わるごとにたくさんさんの知識を身につけ、それを周囲の人に教えていく能力。

オ 自分の適性にあっていなくても、どんなつらい仕事でも、最後までやりぬく能力。

問五 傍線部②「学ぶ意欲は二つのルートで形成されると思われる」とあるが、その二つのルートで形成されるのはそれぞれどのような意欲ですか。本文中から十字以上、十五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 傍線部③「こうした学習方法」とはどのような学習方法ですか。本文中の言葉を使って二十五字以上、三十五字以内で答えなさい。

問七 傍線部④「感動による解凍作業が必要なのだ」とありますが、筆者がそう考えているはなぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 面白さが伝わりにくい形でしか書かれていない教科書は、学習内容に対する「面白い」という感動がなければ、子どもがより高い評価を得ようと努力しないから。

イ これまで批判されてきた伝統的な学力は、子どもたちの個別の学びたい意欲がなければ、身につけることも持続させることもできないから。

ウ 従来の「型」による学習方法のみを提示する教科書は、教師や親による丁寧な指導ていねいがなければ、子どもは習熟したいという気持ちにならないから。

エ 実際の社会で求められている問題解決能力は、問題が解けたときの喜びがなければ、子どもに学習しなければならぬという必要性を感じさせられないから。

オ すごさがわかりにくい記述で書かれている教科書は、教師や親の「すごい」という感動がなければ、子どもの学習意欲はうまれないから。

問八 本文の内容に合うものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 社会生活で求められる知識や技能を素直に身につけようとする学習者を、主体性に欠けると評価するべきではない。

イ 実際に仕事をする上で必要とされるのは、目の前の問題に柔軟に対処していく問題解決型の能力だけである。

ウ どんな子どもも自ら学ぶ意欲を必ずもっているのだから、教師や親などが学習を強制するべきではない。

エ 自分の知らない様々な知識を持つ親や教師に憧れることによって、子ども自ら学びたいという気になっていく。

オ 教科書のどんな学習内容も子どもたちの生活に密着したものであり、自然と学習意欲は生まれるものである。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

妻と子をもつサラリーマンの湯村裕輔は、ある日突然会社が倒産したことを知らされる。妻の厚子は以前勤めていた会社で働くことになった。一方それまでまともに家事をしたことがなかった裕輔は、息子の昇太のために弁当を作り、家事を担当することになった。

裕輔の料理の腕前は格段に進歩した。いわしの蒲焼、などというものが手早く作れてしまうのである。きんぴらごぼうも難なく出来た。昇太の弁当に入れたら、全部食べてくれた。なんと、我が息子の味覚は和風だったのか。プロッコリーを醬油で煮しめることを本気で考えた。

厚子は会社員生活を満喫している様子だ。週末、接待ゴルフに行ってもいいかと聞くので、もちろんいいよと答えた。クラブすら握ったこともないのに、いい度胸である。いつぞやの一件に関しても、「あの馬鹿ポリ、もう踏み切りに立たなくなつてやんの」とほくそ笑んでいた。基本的に外交的な性格のようである。もちろん、結婚前から知っていたのだが。裕輔はふと疑問を覚え、昇太を寝かせた後に聞いてみた。

「昇太を妊娠したとき、会社を辞めたじゃない。あれ、本当は続けたかったんじゃないの？」

「うん。できればね」厚子は即答した。

「どうして続けたいって言わなかったの？」

「ユウちゃんの実家の手前。お義母さんに『厚子さん、仕事は辞めるのよね』って聞かれて。それがすごく無色透明で自然な言い方だったから、つい『はい』って答えちゃったの」

「うそ。そんなことがあったんだ」

おふくろめー。腹の中で文句を言った。

「でも、昇太と毎日一緒にいられてよかったよ。今じゃいい判断だったと思ってる」^③

厚子が涼しい目で言い、裕輔は感動した。

「じゃあわたしも聞くけど、ユウちゃん、サラリーマン生活、いやじゃなかった？」

「べつにそういうことはなかったけど」

「でも、なんか、今のほうが楽しそう」

「まあ、そうだけど、それは失業して気づいたことだから。おれって、家にいるほうが向いてるかも。そんな感じ」

「毎朝、駅に行くとき、パン屋のおばさんに会うの。店の前で掃除してるから。でね、笑顔で挨拶を交わすんだけど、目に同情の色があるの。『大変ね』『くじけないでね』って顔に書いてある」

厚子が眉を八の字にして、吐息交じりに言った。

「そういうのなら、こっちのほうが凄いな。なんたって『逆境に打ち勝つ50の名言』だから」

裕輔は公園であった出来事を話し、その本を見せた。「あはは」厚子が腹を抱えて笑う。

「そうか。我が夫婦は世間から誤解を浴びているのか」

「ジエンダーってしぶといんだよ」[※]

そこへ電話が鳴った。誰だろうと思つて出ると、実家の母だった。噂をすれば、である。「あのね、おねえちゃんに聞いたんだけどね……」母が切り出した。姉には会社が倒産したことを告げてあったので、それが伝わったのだろう。

「大変だったねえ。大丈夫？ 無理しないようにね」

赤ちゃんの肌を撫でるような声である。母はこの世の不況を呪い、政治家を批判し、気落ちしてはいけないと息子を慰めた。そして「おとうさんと代わるからね」と、電話をバトンタッチした。

④ 父と電話で話すことは、ほとんどない。月に一度は様子伺いの電話をかけているが、毎回話すのは母だ。不仲でもないが、父と息子とはそういうものだ。

「ああん」受話器の向こうで咳払いがきこえた。「おう、裕輔か」無理矢理作ったような穏やかな声だった。「災難だったな」

「うん、まあね」

※ 「ハローワークには通ってるのか」

「ううん。失業保険の手続きに行ったきりだけど」

「そうか。通ってないか。まあ、焦ることはない。四十を過ぎると職探しも大変そうだが、おまえはまだ三十六だ。いくらだつて見つかるさ」

「うん、そうだね」

「蓄えは、あるのか」

「多少はね」

「困ったら遠慮するな。おとうさんたちは気楽な年金生活だ。大金じゃなければいつでも都合はつく」

「うん、ありがとう」

少し間があいた。慣れない会話なので、互いが少し緊張している。

「長い人生にはこういうことだつてある」父があらたまつた口調で言った。「晴れの日ばかりではないし、嵐の夜だつてある。ただし、やまない雨はない。いつか、おまえの空だつて晴れる」

「ああ、そうだね」

答えながらどぎまぎした。父は息子への励ましの言葉を一生懸命考え、今、それを伝えているのだ。親は子供のことを

⑤

少しも理解していない。でも存在がありがたい。

「この国で飢えるということはないから、悲観するな。樂觀していればいい。今の土地にこだわることもない。人間いるところ……」

うっ、またしても……。裕輔は身を硬くした。

「青山ありだ」

安堵した。父は「ニンゲン」ではなく、「ジンカン」と正しく読んだ。「セイザン」も。さすがは元教員である。

「人間」は世の中のことで、「青山」は墓場のことだ。だから「人間到る処青山在り」とは、「世の中、どこにでも骨を埋める場所がある」という意味なのだ。

父が「厚子さんと話したい」と言うので、妻に受話器を渡した。

「いえいえ、そんな」厚子がしきりに恐縮している。「わたし、そろそろ外で働きたかつたんです」背中を丸めて訴えかけていた。そして、電話が切れた後、「お義父さんに謝られちゃった」と [1] をすくめた。

「苦勞をかけて申し訳ない、せがれには必ず家長としての責任を全うさせる、だつて」

「あ、そう」裕輔はつい吹き出してしまった。

「ユウちゃん、家長として責任とつてよね」厚子は口の端を持ち上げ、笑った。

「ええ、とりますとも。弁当、君の分も作ろうか？」

「あ、作つて。会社の近くの店、ランチタイムになると、どこも行列で、ゆっくり食べられないのよ」

「じゃあ、きんぴらごぼうと、とりの唐揚げと、出汁巻き玉子と、あとブロッコリーもあるから……」指折り数えた。「あ、そうだ。出汁がもう切れてたんだ。今夜のうちに作っておこうかな」裕輔が腰を上げた。

「ねえ、わたし、先に寝ていい。疲れちゃった」

「もちろん」

「ふふ。奥さんもらった気分。みんなに自慢したい」

厚子は「ふあわわわ」と、インディアンのように手を口にあててあくびを響かせ、寝室へと消えていった。キッチンに立つ。手鍋に水を入れ、洗った昆布こんぶを底に敷いた。

そこで電話が鳴る。今度は誰かいな。出ると山科部長やまのだった。挨拶もそこそこに、興奮した様子でまくしたてた。

「夜遅くにすまん。緊急事態だ。原田のやつがな、おれがナイス商事からスカウトされていることを嗅ぎつけて、自分も売り込みに行きやがった」

あれま、そうですか。裕輔は眉をひそめた。こっちは「部長とコンタクトを取ってみれば」というつもりで教えたことなのに。

「それがな、第二営業の連中を引き連れての売り込みだ。要するに、おれたちとコンペしようって腹積もりだ」

「ええと……おれたち？」

2

を丸くした。

「至急対策を練る。明日の午前十時、新橋第一ホテルのカフェに集合だ。おれは五人連れて行く。その中におまえさんは入ってるが、原田は入っていない。おまえさん、めったなことでは怒らないだろう。そういうところ、おれは評価してるんだ」

「いや、あの……」

「条件は悪くないんだ。これまでの年収の八割を基本線として保証してくれるってよ。あとはおれたちの頑張り次第だ。業績を上げれば社内での独立もありうるし、そうなりゃあ、おれたちは経営陣だ。そうはないチャンスだ。これを逃すことはない。そうだろう」

「ええ、まあ、そうですか……」

「じゃあ明日な。おれはそのままナイス商事に押しかけようとも思ってるんだ。だから背広着てシャキッと来いよ」

まごついているうちに、電話を切られた。手にした受話器を見つめる。

ま、いいか。口の中でつぶやいた。明日起きて決めればいい。

お湯が沸いたので、中火にし、煮立ちかけたところで昆布を取り出した。続いて削り節けずりぶを入れ、弱火で三分間煮込む。火を止め、顔に湯気を浴びた。うん、品よく香っている。

少し置いてから、用意したざるにペーパータオルを被せ、ボウルの上で漉した。あとは冷ましてからペットボトルに入れ、冷蔵庫に入れておけばいい。

ついでにおかずの下ごしらえもすることにした。ブロッコリーは日持ちしないから、買ったその日に塩茹しおゆでしたほうがいい。

冷蔵庫の中を漁あぐっていたら、奥から板チョコが出てきた。カレーに入れるために買ったものだ。昇太に食べられないように隠かくしてあった。

ふとアイデアがひらめいた。ブロッコリーを塩茹しおゆでして、溶かしたチョコレイトで丸ごとコーティングするのはどうだろう。

弁当箱を開け、チョコがあると思つて目を輝かがやかせる昇太。大口で頬張ほおばる。中身はブロッコリー。うっしっし。裕輔は想像するだけで笑ってしまった。

やらない手はない。これは父と子の戦いなのだ。

もう一度鍋に湯を沸かし、そこに小さなボウルを浮かべた。割ったチョコレイトを投入する。たちまちしんなりして溶け出した。

カカオのいい匂いが鼻をくすぐった。⑥ここが青山でもいいと思った。

(奥田英朗「ここが青山」より)

※いつぞやの一件……厚子が再就職はじめたころ、厚子と警察官と少しトラブルになったことがあった件をさす。

※公園であった出来事……裕輔は公園で出会った老人から本をすすめられたことがあった。

※ジェンダー……社会的、文化的な男女の性。

※ハローワーク……職業紹介、指導、失業給付などを全て無料で手掛ける国の機関。

※山科部長……裕輔が働いていた会社の上司だった。新しい職場を探そうとしている。

※原田のやつ……裕輔の元同僚で、以前裕輔と会い、山科部長が新しい職場を探そうとしていることを教えた経緯がある。

※コンペ……コンペティションの略。競争の意。

問一 波線部 a・b の本文中での言葉の意味として、最も適当なものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えな
よ。

a 「恐縮している」

- ア 存在の大きさにひどく怖がっている
- イ 相手の出方が分からず混乱している
- ウ 相手の態度に対し申し訳なく思っている
- エ 緊張してなにもできなくなっている
- オ あまりに驚いて体が動かなくなっている

b 「腹積もり」

- ア これからしようと思っている大まかな計画
- イ 実現が期待できそうもないあいまいな夢
- ウ もっとも喜ばしい理想的な展望
- エ 計画が上手くいかなかったときの第二案
- オ 損するか得するかというおおよその打算

問二 空欄 1・2 に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただ
し、同じ記号は二度使いません。

- ア 腰
- イ 手
- ウ 肩
- エ 頭
- オ 目

問三 傍線部①「ない」とありますが、この「ない」と同じ使い方のものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア この事件による影響はすくない。
- イ 今日のエンジンの調子に問題はない。
- ウ わたしの弟はまだまだおさないところがある。
- エ 環境問題はそれほど簡単には解決できない。
- オ 彼はちっとも練習をまじめにしない。

問四 傍線部②「ふと疑問を覚え」とありますが、どのような疑問ですか。本文中の言葉を使って、三十字以上、四十字
以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「今じゃいい判断だったと思ってる」とありますが、結果がどうであったから「いい判断」だと言っているのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 妊娠をきっかけに仕事を辞め、息子との時間を共有できたから。
- イ 会社が倒産したことをきっかけに、家事と育児に従事し楽しめたから。
- ウ 今までの仕事をあきらめて、本当の夢を追う決意ができたから。
- エ 裕輔の会社の倒産をきっかけに、再び望んでいた仕事を始められたから。
- オ 結婚を機に仕事を自ら辞め、家事に専念して裕輔を支えられたから。

問六 傍線部④「父と電話で話すことは、ほとんどない」とありますが、「電話で話すことは、ほとんどない」にもかかわらず、「父」は「裕輔」にこの電話で何を伝えようとしているのですか。本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑤「親は子供のことを少しも理解していない」とありますが、「父」と、「裕輔」はどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父は裕輔が再就職するだろうと思っっているが、裕輔は家事をすることが楽しく積極的に再就職先を探そうとは思っっていない。
- イ 父は裕輔に時間をかけても高い収入が得られる就職先を探してほしいと思っっているが、裕輔は少しでも早く就職先を見つけたいと思っっている。
- ウ 父は裕輔の妻である厚子にこのまま働いてもらいたいと思っっているが、裕輔は厚子に家事をしながら働いてほしいとまでは思っっていない。

問八 傍線部⑥「ここが青山でもいいと思っった」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 失業したことで家事をしてきた妻の苦勞がわかり、これからは積極的に家事を手伝って生きていってもいいと思っったといふこと。
- イ 失業したことで会社員として働くのが難しいと気づき、このまま家で息子の世話をしながら生きていくしかないと思っったといふこと。
- ウ 失業したことで自分が家庭のことに無関心であったことに気づき、これからは家庭のために生きていってもいいと思っったといふこと。
- エ 失業したことで仕事のありがたみが身に染みてわかり、これから探す仕事は真剣に取り組んで生きていくしかないと思っったといふこと。
- オ 失業したことで自分が家事に向いっているかもしれないと気づき、このまま家事に専念して生きていってもいいと思っったといふこと。

問九

本文からわかる、登場する人物の説明として、最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 裕輔は、どのようなことにも前向きで、周りにいる人たちをいつも明るくさせようと気を配っている。
- イ 厚子は、家事をしてくれる裕輔の存在をありがたく思いながら、再び働くことを楽しいと感じている。
- ウ 裕輔の父親は、世間体ばかりを気にしているため、再就職する気のない裕輔の考えが許せないと思っている。
- エ 裕輔の母親は、とつぜん厚子が働くようになり、孫の昇太が母親と過ごせずかわいそうだと感じている。
- オ 裕輔の元上司である山科部長は、部下想いで、自分のことよりも部下全員を再就職させたいと思っている。

三

次の各問いに答えなさい。

問一

次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① オンダン_____な気候の地で暮らす。
- ② ケンチヨウ_____所在地を暗記する。
- ③ 病院でイチヨウ_____の検査をする。
- ④ モクゾウ_____の集合住宅を借りる。
- ⑤ 両国の紛争_____をチヨウテイ_____する。
- ⑥ 大雨でカセン_____が増水する。

⑦ 民主主義のテツソク_____を守る。

⑧ ヤトウ議員_____が質問に立つ。

⑨ 両国のシュノウ_____が握手する。

⑩ ヒルイ_____ない美しさを味わう。

問二

次の熟語の読み（音と訓）の組み合わせとして同じものを次のア～エの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 毒舌 ② 強味 ③ 若者 ④ 王様 ⑤ 冊子

ア 屋台 イ 街角 ウ 役割 エ 夏至

問三

次のことわざ・慣用句の意味として適当なものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① お茶を濁す ② 勝てば官軍 ③ 冷や飯を食う ④ やり玉にあげる ⑤ 盗人にも三分の理

ア 能力が正当に評価されずに、冷遇れいごうされた状態。

イ いい加減な発言や処理によってその場を適当にごまかす。

ウ 攻撃や犠牲ぎせいの対象にする。

エ 勝利を得ると、勝った側がすべて正しいということになること。

オ どんなことでも理屈りくつをつけようとすれば何かしらつけられること。

